

パル-わ

☆☆ 気に掛かるボランティア ☆☆

昨秋ボランティアとして認知症の人のグループホームを訪れた。

認知症の人とかかわったことがなかったため、どう接して良いのかわからなかった。不安もあったが実際に訪問して話しているうちにだんだんと話せるようになり、おばあさん側からもどんどん話してくれるようになった。

帰る時にはおばあさんから「ありがとう」と感謝の言葉をもらい、大したことはできなかったけれど、喜んでくれて「良かった」とうれしくなった。しかし、なぜかよそよそしいそぶりの職員の人もいて妙に心にひっかかった。

授業で勧められて行ったボランティアなのでその後は行っていない。日常は忙しく普段は思い出すこともなかったが、ときどき職員の人のごとが気にかかっていた。

年が明け、冬休みに考えてみた。あの日のボランティアは私に満足感を与えるものではあったが、職員の人にとっては素人に仕事をじゃまされただけだったのかもしれないと今では思う。ボランティアという良いことのように思われがちだが、自己満足な部分もあり他人の迷惑になっていることもしばしばあるのだと思った。

その人と本気で向き合っていくわけでもなく、その時だけという自分勝手なことば、すべきではなかったのかもしれないと悔やんでいる。

宇山 まゆ奈 (19歳) 一徳島市東吉野町、大学生

1人暮らし

☆☆ ボランティアの意味学 ☆☆

昨秋、認知症のグループホームにボランティアをしに行く機会があった。掃除をしたり、入所者の方と一緒に歌を歌ったり、嚔下障害を防止する体操をしたりした。

そのときは充実感を味わうことができ、他人の役に立っていると感じられた。しかし、スタッフの方からお話をしてくださいと言われ、いざテーブルを囲むとなると何を話してよいのか分からなくなった。

全然話をできずに帰ることもあり、何のためにやっているのかわからないときもあった。また何もできずにスタッフの方に迷惑を掛けてしまうことや、ボランティアに行っているのにお客さんのようになってしまうこともあった。

当たり前のことではあるが、ボランティアというのは自分が充実感を得るためや、役に立てたと思ふことを期待して行うものではないということに気付いた。

また、ボランティアは続けていくということに意味があるのだと思うようになった。その気がないのなら行かない方がよいのかもしれない。その気がないのに行くことはスタッフや、入所者の方々にとっては気を遣うだけで迷惑なことかもしれないのだから。

ボランティアとはどういうものであるかというのを理解するためにも、ボランティアを続けていくことと思う。

越智 玲衣 (19歳) 一徳島市住吉、大学生

徳島新聞 2010年(平成22年)2月9日(火曜日)

26面 土3は 読者の手紙欄

認知症患者訪問、貴重な体験

(徳島市、小川祐貴・19歳・学生)

先日、大学のボランティア実践で、認知症の方のグループホームを訪問する機会があった。今までボランティアの経験がほとんどない僕は、不安でいっぱいだった。到着すると僕たちを温かく出迎えてくれて心がほっとした。

僕は掃除や洗濯といった作業をすと思っていたが、実際はタオルを使った体操や、一緒に歌を歌ったり楽しく会話をしたりするなど、初めに想像していたものとは全く違っていた。また、昼食をいただくことになり、ボランティアに行ったのではなく、お客さんのようになってしまった。

高齢者の方とあまり話をしたことのない僕は、会話をすることに不安を感じた。しかし初対面の僕にうれしそうに笑いながら「私の若いころはね…」と話してくださった。そうしているとすぐに帰る時

間になってしまった。帰り際に、あるおばあさんが「今日はありがとう。また来てよ」と言ってくれてとてもうれしかった。

何一つボランティアらしいことができなかったが、一緒に過ごすことで高齢者の方に楽しんでもらえたのだと分かった。次回訪問する機会があれば、高齢者の方の心の支えとなれるようなボランティアができるように心掛けようと思う。

* みんなの広場

認知症の人の可能性を生かして

大学生 兼松 祐輝20(徳島市)

認知症の方が暮らす徳島市内のグループホームを大学の仲間と一緒に先日、訪問した。

寒い日で、前日の雪が少し残っていた。人柄の良さそうな園長さんとそこで暮らしている方数人が迎えてくれた。あいさつや簡単な世間話をしたが、私にはとても認知症の方とは思えなかった。

屋外で窓ふきをした。ぞうきんを絞る水は凍りつくように冷たい。部屋の中では皆さんが楽しそうに歌っていた。お茶の時間にも立

ち会った。多くの方が自分でお茶を運んでいる。身の回りのことも自らしている。「自分でできることは自分でする」というのがこのホームの方針だそうだ。

認知症の方には確かにハルデイはあるだろうが、何もできないのとは違う。やれることだってたくさんあるはずだ。だが、無意識のうちにはできないのだと決め付けていないだろうか。

高齢化が進む日本の社会ではこうした方たちの生きがいや可能性を生かすことも重要だと改めて思った。

毎日新聞、平22年2月(3日(土))

17面 くらしナビ 『みんなの広場』